悲しみを分ける特徴

—泣きのオノマトペの表出特徴に着目して—

○白井真理子¹・曾雌崇弘²・鈴木直人³

(¹同志社大学心理学部・²大阪大学大学院生命機能研究科・³所属なし)

キーワード: 悲しみ, オノマトペ, 行動活性特徴

Distinguishing features for subtypes of sadness

Mariko SHIRAI¹, Takahiro SOSHI², and Naoto SUZUKI¹

(¹ Faculty of Psychology, Doshisha Univ., ² Graduate School of Frontier Bioscience, Osaka Univ., ³ N/A)

Key Words: sadness, onomatopoeia, behavioral activation property

目 的

悲しみには、死別のような「喪う悲しみ」と失敗のような「達成できない悲しみ」のように、サブタイプが存在することが示されている (白井・鈴木, 2015; Shirai & Suzuki, 2017)。しかしながら、悲しみのサブタイプがどのような特徴に基づいて弁別され、異なる概念として内在化されているかは明らかになっていない。

どのように内在化されているのかを調べる方法の一つとして、感情の諸相を概念化している言語表現による評価が挙げられる。白井・曾雌 (2017) は、感情や生理的变化に関わるオノマトペに着目し、死別と失敗の文脈において、泣きの表現に関するオノマトペがどの程度当てはまるかについて検討した。その結果、死別に適合する語は「ぼろりぼろり」など静的・無声表現である一方で、失敗は「わんわん」など動的・有声表現と適合度が高かった。このことから、悲しみのサブタイプは、感情表出特徴に基づき、異なる概念として内在化されていることが示唆された。そこで、本研究は、「感情表出の背景にある行動活性特性が、悲しみのサブタイプを異なる概念として成立させる特徴の一つである」という仮説を検証するために実験を行った。

方 法

実験参加者 大学生 22 名 (男性 6 名, 女性 16 名), 平均年齢 20.09 歳 ($SD = .73$ 歳) であった。

提示刺激 白井・曾雌 (2017) より、死別の文脈に適合度が高かった 4 語 (ぼろりぼろり, ほろりほろり, うるうる, さめざめ: 以下死別語), 失敗の文脈に適合度が高かった 5 語 (わんわん, うえんうえん, うわんうわん, べそべそ, ぎゃーぎゃー: 以下失敗語) の全部で 9 語を用いた。

提示文脈 悲しみの概念を弁別する表出特徴として、2 つの行動活性特徴に関わると想定し (: 「動的・静的」・「有声・無声」), 提示文脈条件として用いた。

1) 動的表現 (激しく○○泣いた) ・静的表現 (静かに○○泣いた)

2) 有声表現 (○○泣き叫んだ) ・無声表現 (○○むせび泣いた)

手続き 23 インチのモニターの中心に、ランダムに刺激文を提示し、刺激文のオノマトペの適合性を評価する課題を行った。刺激文は、Presentation software (Neurobehavioral Systems, Inc., Albany, CA, USA) を用いて提示した。実験参加者は、オノマトペが提示文脈にどの程度適合するかについて 7 件法で評価した (“全く当てはまらない” = 1, “非常によく当てはまる” = 7)。36 刺激文 (9 語×4 文脈) すべてに対して適合度の評定を求めた。課題は参加者のペースで行った。

結果処理 各感情語に関して、4 種の行動活性特徴における適合度評価の平均値を算出した。死別と失敗の文脈に適合度の高い語の特徴を調べるため、死別語 (4 語) と失敗語 (5 語) の全体平均を算出し、それぞれの行動活性項目において対応のある t 検定を用いて比較した ($p < .05$)。

結 果

Table1 に結果を示す。失敗語は、動的特徴および有声特徴において、死別語より適合度が有意に高かった。逆に、静的特徴は、死別語が失敗語より適合度が有意に高かった。無声特徴は、死別・失敗語ともに中程度であったものの、失敗語の方が死別語よりも適合度が有意に高かった。

Table1. 死別と失敗に関連する言語表現における行動活性特徴の適合度比較

	死別語		失敗語		paired t -test	
	M	SE	M	SE		
動的	1.95	0.18	5.47	0.19	$t(21) = 18.99$	$p = .001$
静的	5.70	0.22	2.57	0.16	$t(21) = 11.45$	$p = .001$
有声	1.94	0.21	5.12	0.22	$t(21) = 12.27$	$p = .001$
無声	2.89	0.27	3.83	0.27	$t(21) = 2.97$	$p = .001$

考 察

本研究は、悲しみのサブタイプが、どのような特徴に基づいて異なる概念として内在化されているのかを明らかにするため、言語表現の一つであるオノマトペを用いて実験を行った。その結果、死別と失敗の悲しみのサブタイプの区別には、感情表出の動的・静的特性と有声・無声性に関わることが明らかになった。

死別語が静的な表出特徴を持つのは、喪失に対処するためエネルギーを保存し、さらなる喪失を避けるために活動性を下げる (Frijda 1986; Malatesta & Wilson 1988) という悲しみの行動不活性特徴を反映していると考えられる。一方、失敗語が動的・有声特徴と適合度が高いのは、行動を活性化し、声を出すことが、達成できなかった目標を実現するために他人の助けを得る有効な手段であることに起因する可能性がある。

今後は、行動活性特徴が、どのようなプロセスを通して、悲しみの弁別特徴として定着し、どのような心理的機序に基づいて、悲しみを分類し内在化しているのかを明らかにする必要がある。

引用文献

白井真理子・曾雌崇弘 (2017) 明示化された二つの悲しみ死別の悲しみはぼろり, 失敗の悲しみはわんわん? 日本心理学会第 81 回大会発表論文集